

令和 8 年 2 月

第 3 回白山市総合教育会議

会 議 録

白 山 市

令和7年度 第3回 白山市総合教育会議

日 時 令和8年2月13日（金）午後3時

場 所 白山市役所4階 402会議室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 会議事項

(1) 教職員の多忙化改善実施計画について

(2) その他

4 閉 会

出席委員

白山市長	田 村 敏 和
白山市教育長	清 水 茂
白山市教育長職務代理者	竹 内 千恵子
白山市教育委員	尾 張 勝 也
白山市教育委員	安 川 薫
白山市教育委員	佐 賀 一 夫
白山市教育委員	林 勝 洋

事務局出席職員

教育部長	谷 口 由紀枝
教育総務課長	西 村 幸 広
学校教育課長	山 口 昭 恵
学校指導課長	齋 藤 信 之
生涯学習課長	東 雅 宏
松任図書館長	澤 田 憲 司
美川図書館長	中 野 康 則
鶴来図書館長	東 陽 一
子ども総合相談室長	和 田 寿美恵
教育総務課長補佐	瀬 川 達 也
教育総務課主幹	山 崎 有 香

傍聴者 1 名

開会 午後 3時00分

◎市長挨拶

○教育総務課長（西村 幸広）

定刻になりましたので、ただいまより令和7年度第3回白山市総合教育会議を開会いたします。本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり、本日の会議を公開といたしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○構成員

異議なし。

○教育総務課長（西村 幸広）

それでは公開といたします。開会にあたり、田村市長からご挨拶をお願いいたします。

○市長（田村 敏和）

本日は、ご多忙の中、令和7年度第3回白山市総合教育会議にご出席を賜り、誠にありがとうございます。また、委員の皆様におかれましては、日頃より本市教育行政の推進に多大なるご尽力をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

近年、少子化の進行、社会全体のデジタル化の加速、さらには不登校児童・生徒の増加など、学校教育を取り巻く環境は大きく変化をしております。教育行政にはこれまで以上に柔軟かつ的確な対応が求められていると思っております。国におきましても、次期学習指導要領の改訂に向け、子どもたち一人ひとりの「生きる力」を育むための多様な学びの在り方について、活発な議論が進められているとお聞きしております。

また、本日の議題であります「教職員の多忙化改善実施計画」につきましては、給特法改正による処遇改善と併せまして、学校現場における働きやすさ、

そして、働きがいの向上を実現するための極めて重要な取組であると思っております。教職員の働き方は、教育の質や学校教育の持続可能性に直結するものであり、教職員が心身ともに健やかに、専門性を十分に発揮しながら教育活動に専念できる環境を整えることは、子どもたちの健やかな成長を支える基盤であります。本市におきましても、これまで業務の見直し、ICTの活用、学校支援体制の充実などを通じまして、教職員の負担軽減に取り組んでまいりましたが、依然として多忙な状況が続いていることも認識しているところでございます。今後は、これまでの取り組みの成果と課題を踏まえつつ、より実効性の高い施策へとつなげていくことが求められております。

本日の会議では、現状を改めて共有させていただき、課題を明確にしたうえで、実行可能で持続性のある改善策について、率直かつ建設的なご意見をいただければと考えております。本市の教育の質をさらに高め、将来を担う子どもたちにとって、より良い教育環境を実現するために皆様のお力添えを賜りますようお願い申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。どうぞ本日はよろしくお願いいたします。

○教育総務課長（西村 幸広）

ありがとうございました。それでは会議事項に移ります。会議の進行は、主宰者である市長にお願いしたいと思います。市長、よろしくお願いいたします。

◎協議事項

○市長（田村 敏和）

それでは会議事項に入ります。本日の議題は「教職員の多忙化改善実施計画について」ということで、事務局より説明をお願いいたします。

○学校指導課長（齋藤 信之）

（資料にて説明）

◎意見交換

○市長(田村 敏和)

それではただいまの事務局の説明につきまして、委員の皆様からご意見またはご質問もいただければと思いますが、いかがでしょうか。また後半の方は改めて説明してもらいますので、前半の部分について何かご質問ありますか。

○教育長職務代理人(竹内 千恵子)

まず、さっと拝見いたしまして、この白山市の「働きやすさ」と「働きがい」二つの両立ということと、それが子どもたちの教育にきちんと結びついているという点でこのキャッチコピーは、大変良かったと思います。それから、何もないところから作ることはなかなか大変なので、学校指導課も大変だったということは推察いたします。そこで1点目の質問で、計画案の2ページに時間外在校等時間の人数分布があります。今、ご説明をいただいて、3ページの目標では例えば月平均30時間以内に減少させるというわけで、この30時間とは県に合わせたのだらうと分かりました。これが1年について360時間、1か月にすると30時間という目安なのだろうと思うのですが、この分布表を見たときに、0から45時間までのところに、令和6年度でしたら小学校は7割強の先生方、中学校が半分の先生方に当てはまるわけです。ここをもう少し丁寧に説明して欲しかったです。この30時間のところに、どういう分布があるのか。0から45までという幅の中で0や10や20に近いのか、40や45に近いのかの分布が、45時間という一括りでは分からないわけです。小学校では45時間を超えて80時間までの枠の人数が26.8%で平均33.2時間なので、平均のところに来ているのかと予想はしました。中学校については、この半分の人がいったい0から45時間の間の30時間前後に人数がいるのか、もう限りなく45時間に近くて、もう少しで80時間までの枠に入ってしまうのかが分からなかったもので、もし目標を月平均30時間にするならば、これは県や国の基準に合わせているのですけれど、月平均30時間とした丁寧な説明があったら良かったという感じはします。もう1点は、ずっと働き方改革が問

題になっていて、でもなかなか解決に結びつかない。では何がネックなのかというところの分析が、本当はもっときちんとならうと思ったと思うのです。それは文科省が3分類に分けた中のAとBを読んだら、多分これが多忙化の大きな要因なのかと思ったのですが、白山市では一体何がネックになって、なかなか解決に結びつかないのかという分析を、もう少し知りたかったという印象を持ちました。全体的によくできていらっしゃるし、後から出てくるのだらうけれど、この文科省の3分類に対して一つひとつ丁寧に解決策を載せていらっしゃるのでも良いのですが、もう少し白山市として目標を30時間に持ってきたときに、先生方の働き方の分布はどうなのか、本当の原因はどこが一番大きいのかという分析を知りたいと思っていたので、もう少し今の説明にあたらう良かったと思いました。

○学校指導課長（齋藤 信之）

まず30時間の説明ということですが、やはり1年間を見ますと繁忙期というものがございます。特に年度始めなどは時間外在校等時間が多くなります。その際においても45時間には抑えたい、でも、ならずと30時間、つまり年間360時間を超えないことを目標に掲げているということで、30時間という数値が設定されていると認識しております。これまでの取組で何がネックかというところかと思いますが、まず、なかなか80時間超がゼロにならない、少しずつ減っているものの、平均30時間にならないというところで言いますと、まずは役職によって二極化していることを感じます。平均しますと30時間以内に収まっている教員もいます。ですが、やはり役職で言いますと、教頭、そして主任層、教務主任、研究主任、生徒指導主事の勤務時間が非常に長くなっていることが小学校、中学校ともにあります。それと中学校におきましては、やはり部活動が大きいと思っております。土日に部活動として勤務している方の80時間を超えている割合が非常に高いです。ですので、総じて二極化していますので、その多い方たちの時間数をいかに下げていくかが課題かと思いますが、そこにつきまして言いますと、一番は定数改善が考えられるところで、それは引き続き国、県に要望していかなくてはならないことであります。また、この3分類にありますように、それぞれの分類の中で、学校外、教師外という

ところが、いかに今まで教師がやっていたことを担っていただけるかどうかとも非常に大きな鍵かと思っております。

○教育長職務代理者（竹内 千恵子）

二極化ということは、その二極化した教頭、主任層に配慮した対策を大きく打ち出さないと、なかなか二極化は解消しないと思うのです。平準化という言葉があるのですが、この管理職がする仕事を新規採用の人がするわけにもいけないので、これもなかなか難しいだろう。ここはやはり知恵を出していただいて、外部委託できるものはお願いしたいと思います。もう一つ質問いいですか、意識改革を図っていくのですよね？意識改革ということは、AからBに変わるわけですが、一体今の先生方の意識とはどういうものなのか。だから変わる、どういうものにしたいのか、というところを少しお話いただけませんか。

○学校指導課長（齋藤 信之）

まず平準化につきましては、おっしゃるように教頭先生の業務を一般教諭が行うのはなかなか難しいことと思いますが、国、県の補助金も利用しまして、教頭マネジメント支援というものが入ってきていまして、今年度一人追加となり、中学校1名、小学校1名ですが配置されたのは、非常に大きいかと思えますし、これからどんどん広がってほしいと思います。現に教頭マネジメント支援が入った教頭先生の勤務時間は大きく下がっているという結果も出ておりますので、こういったところの充実が非常に重要かと思っています。それと意識改革ということですが、これまで子どもたちのためだから際限なく良いものを、というときに限り、限界を設定しないでやってきたところがあるかと思っています。ですが現在、できるだけ勤務時間内に業務はするものだという意識が少し高まっているかと思っています。そこに先ほどの平準化も関わるかと思いますが、この計画案の中にもチーム担任制の推進ということも載せています。これも大きく業務を一人で抱えるのではなく、組織でやるというような平準化に繋がっていると思います。昨日、衛生委員会がありましたが、今年中学校で1校、チーム担任制モデル校として頑張ってくれた学校の先生がいて、非常に良いということで、どんどん広げてほしいというようなことも言われていま

した。そうは言ってもやらないと分かりませんので、試して、その結果良いものはどんどん市全体に広げていくようなことをしていかななくてはならないと思っていますところす。

○市長(田村 敏和)

他にご質問ございますか。————— それでは私から、聞いていいですか。
チーム担任制を取り入れたら何が、その要因として変化するのか。チーム担任制の詳細をもう少し教えてください。

○学校指導課長(齋藤 信之)

まず、私どもはまだ教員になりたての頃は、担任したいという気持ちが非常に大きかったように思うのですが、今は担任ではなくて、級外の方が良いという方もどんどん増えているというようなことを耳にします。やはり担任と言いますと朝の会から帰りの会まで、成績処理の中心にももちろんならなくてはいけない、個人懇談もというところで担任という業務が非常に多岐にわたっているというふうに思います。給特法改正により担任手当というものも1月からついておりますが、それでも業務が変わるわけではないですので、それは中学校も小学校もそうなのですが、一つの学級を複数で持つことにより、朝の会は私が、給食は私が受け持つ、帰りの会は私が受けます、ということが出来ます。ただ、保護者対応の窓口は、なかなか分散するのは難しいと思います。そこは取りまとめる一人はいるとしても、1日のスケジュールの中での分担が明確にできることで、チーム体制の場合、担任をする気持ちが非常に軽くなったというようなことも言っているところが一番大きいかと思っています。

○市長(田村 敏和)

このチーム担任制というシステムは、実は前々からあって、よく名前も出ていたと思うのですが、定着しない理由は何かあるのですか。

○学校指導課長(齋藤 信之)

これは私の思いですが、なかなか良い取組をしても、共有する場が少な

かったのかと感じております。ですので、今年度から現在、白山市の抱える課題をいくつか設定し、モデル校として、それぞれの学校に取り組んでいただいております。その結果について広げる場、校長先生方が集まった場において、成果と課題を共有する場を今年度設けまして、教育委員さんにも出席していただいたところです。良い取組はそれぞれがやっていますので、それを市内全域に広げることが非常に大事なことから思いますし、そこが欠けていたのではないかと思います。

○市長(田村 敏和)

また後半の部分で出るかと思いますが、それ以外で何か皆さん、ご質問ありますでしょうか。

○教育委員(尾張 勝也)

竹内委員さんの言った流れで、学校指導課長が言った二極化について、自分が教員の頃と言うと相当昔ですけど、主任制度もあまりきちんと機能していなかったというような時代でした。だから何かと言うとみんなで見る、みんなで学校を運営していくという感じでした。初任だろうが誰であろうがみんなで子どもを見る。でも、主任含めて誰かに役が当たると、良い意味で分業化なら良いのだけれど、悪い意味で集中化と言うか、この人に任せる、子どもの問題だったら生徒主任と言うので、みんなが分業化すればするほど、本当は自分事のはずなのに自分事でないような先生がいっぱいいるのです。例えば合宿にきました、イワナ掴みをします。みんなで見なくてはいけないのに、ある先生はずっとビデオを撮っている。そこで子どもがもたもたして転んで怪我しそうになっている場面で「『先生、子どもが怪我しそうになっていますよ』、『いや僕はビデオ係なので』」という笑い話のようなことが学校で当たり前に起こっていると思うのです。だから分業化、細分化すればするほど、バラバラになって一人の負担がなくなるように思うのだけれど、逆に絞られて自分がしなくてはならない、どうしよう困ったみたいな一人で抱える部分もすごくあるのではないかな。抱えすぎる、或いは他人の事のようなのである。結果的にチーム〇〇と学校名の合言葉でやっているけれど、いろいろな学校を見ている中でチームとし

てみんなで見えていこうという雰囲気がとても薄いように自分は考えています。平準化も意識改革もそうですが、分業化された自分の役目を果たすのは当然だけれど、場合によっては誰かに「ごめん、大変だから手伝ってくれる？」と言いながら、みんなでもっとやっていくということがまず大事ではないか。今日は別にこのこと言うつもりは全然なかったのですが、そう思いました。質問は、とても初歩的なことを聞くと思うのですが、この時間とはタイムカードですよ？タイムカードに表示されている時間が、確実に学校に来た時間と学校から帰る時間でとらえて良いのでしょうか、という質問です。

○学校指導課長（齋藤 信之）

まず、分業することが本当に効率化となっているのかと言いますと、私も同感でして、分業の中の繋がりはとても大事だと思います。なので、一人で抱え込むところで時間がかかっていることも、現場を見ますとすごく感じます。やはり分業は大事なわけだけれど、その中での繋がりを意識しないと、なかなか効果的な取組はできないかと思っています。あと、タイムカードの方ですが、現在タイムカードではなくて、職員室に入ったときにタイムカードと同じなのですが自分の名前を押す、出るときに押すと退勤という形になっておりますが、この4月から、自分のパソコンのC 4 t h内に出勤のボタンがありまして、自分のパソコンによって出勤退勤をするようになります。

○教育委員（尾張 勝也）

なぜその質問したかと言うと、昔からそうだけれど、例えば勤務時間が終わったら、みんなすぐ帰るかという職員室で雑談をしている、何となく過ごしている時間があつたのです。だからこの中にはその時間が入っているのか、いないのか。仕事が終わって退勤ボタンを押してから、雑談しながら職員室にいるような時間はあるのか。自分はそんな時間も結構大事だと思っています。仕事が終わって、学校が例えば同僚との語らいというか、くつろぎの場、アフターの場にもなっているのか。昔は仕事が終わってから近くの喫茶店に先生みんなで行って、いろいろ雑談していたのですが、だから、その辺も含めて学校の職員室という場が先生たちにとって単なる仕事の場だけではなく

て、もしかしたら、そういう意味の使われ方もしているとしたら、それは良いのか悪いのかということも含めて気になっているので、質問をさせてもらいました。

○学校指導課長（齋藤 信之）

あくまでも時間外勤務時間ではなくて、時間外在校等時間ということですので、その時間も入っていると思いますし、雑談の時間も大事だと思います。もしかするとそれがメンタルヘルスというところにも繋がっているかもしれませんので、あくまでも学校に来てから、学校から出るまでというような、そういった時間も含んだ時間というふうに認識しています。

○教育委員（尾張 勝也）

時間外勤務を減らさなければならないから、帰ったことにして、そのままいるということはない？

○学校指導課長（齋藤 信之）

職員室の入口のところに今はありますので、わざわざそこに行って押していることは、自分はないと思っていますし、現に自分が現場のときに、そんなことをしている人を見たことはありません。自分のパソコンになった場合に、わざわざそういうことを考えるかは分かりませんが、パソコンの電源を消す際に退勤にして、消して帰るというような流れになるかと思っています。そういうことがないように、また声掛けをしていきたいと思っています。

○教育委員（尾張 勝也）

あまり数字にこだわってそれが目的になると、残っている人はとりあえず消してから残ってくれ、みたいなことも起こり得ないことではないと思ったので、聞きました。

○市長（田村 敏和）

その他ないですか。

○教育委員（安川 薫）

素朴な疑問なのですけれどもよろしいですか。勤務時間そのものの長さということで、仮にチーム担任制が浸透していった場合に、朝の会はこの先生となると、本当はこの時間から出勤なのだけれど、少し遅れてここからここまでみたいな働き方や、今日は日中したいことがあるから、中抜けをしたいという勤務体制が今あるのか、もしくは今なくても今後考えられるのかを教えてくださいませんか。

○学校指導課長（齋藤 信之）

おっしゃるように働き方が非常に多様化しています。例えば、育児短時間勤務といって1時間目にお子さんをこども園に送って、9時から出勤という方もいます。ですが、そういう方でも給食なら出ることができるということで、つまりチーム担任制にすると、そもそも朝から普通の勤務時間に来ることができなくても担任ができるというメリットもございます。今、本当に多様な働き方になってきておりますので、そういった面でもチーム担任制はメリットが大きいと思っております。現に育児短時間勤務の方がチームに入っていることも聞きます。

○市長（田村 敏和）

その他ございますか。

○教育委員（佐賀 一夫）

先ほどから資料を拝見していて、とても良くできていると思っているのですが、尾張委員さんも言われたように、あまりこの数値目標達成に向けて、かえって先生方の心労に繋がらなければ良いと思っています。もし時間をかけてやりたい課題があれば、認めてあげるような風潮があったら良いと思いました。それと、管理職側からの評価、検査の数値でコントロールするだけではなくて、先生方同士、先ほど言われていた話し合いの中で、自分たちの仕事の質を同僚同士で評価し合って、こうすれば良かったということを話し合える環境

づくりが大切なのかと思いました。アドバイスを求めたり、教えてほしいと言ったり支援が必要だと言える環境づくりもあっていいのかと思います。民間の会社では普通にあることなので、1から10まで一人の先生が請け負うことはないと思います。そこは柔軟に対応していただけたらと思います。

○市長(田村 敏和)

他ございますか。

○教育委員(林 勝洋)

この教職員の多忙化改善実施計画を初めて見させていただいたのですけれども、はっきり言って、とても細かいところまできちんと書いておられると感じました。これで何を言えば良いのかが正直な印象です。そこで思ったことが何点かあり、要するに教職員の方が自らしっかりと改革をする、取り組む姿勢がないと目標がなかなか達成できないのではないかと。どんどん上から、組織からこれが良いという話はされても、自らが改革しよう、ゼロにしよう、少しでも減らそうというような意識がないと、結局、取組とはなかなか前に進んでいかないのかと最初に感じました。そのためには何をしなければいけないか、分からないなりに考えたときに、やはり管理職の取組の方向性と、もう一つは各学校で、どうやって全体として取り組んでいくかを明確に表現しながら進めていく必要があることを感じました。それからもう1点、学校というと春休み、夏休みといった長期休暇があります。学期中には実際、例えば教材研究といった、いろいろなことをやっていると思うのです。長期休暇中に研修は当然されていると思うのですけれども、その期間を有効的に使って教材研究の良いものを、例えば校長先生だけではなくて、現場で実際やっている同じ学年の先生方、同じ主任の先生方が、それぞれの括りの中で集まって、学び合いながら良いことを水平展開させていくようなやり方も必要なのかと感じました。実際、計画の中に出てきているので、されているとは思いましたが、そういうところも必要なのかとは感じました。

○学校指導課長（齋藤 信之）

まず管理職が意識を持って、というところは同感でございます。まずは管理職の方が、すべての先生方の健康をしっかりと大事にすることが、子どもたちのより良い教育に繋がるということです。そういった視点で先生方の意識の向上とは、まず管理職の意識の向上かと思えますし、総合教育会議や教育委員会会議、議会等を経まして、現場の先生、校長先生にも見ていただいて、また加除修正していきたいと思っておりますので、現場の方が、まずは管理職中心に意識改革を図っていただきたいと思っております。あと、良いものを共有していくことにつきましては、現在も教材・教具の共有化を推進しております。先ほど申し上げましたチーム担任制も、まさに教材の共有ともかなり大きな関わりがありますので、また進めていきたいと思っております。ありがとうございます。

○市長（田村 敏和）

後半の部分をまだ説明いただけていないので、後半の部分、5ページからお願いします。

○学校指導課長（齋藤 信之）

（資料にて説明）

○市長（田村 敏和）

それでは、後半を説明いただきましたが、前半も併せて質問、ご意見等をお願いします。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

まず、この8ページのところに「職員室内に職員同士で対話ができる空間づくりに努める」とあるのですが、大事なことですけれども教職員だって労働者です。ですから労働基準法や労働安全衛生法ではきちんと労働時間に応じて何分の休憩時間を設けなくてはいけない、男女別に休息室を設けなさい、50人以上の職場だったら、月1回衛生委員会を開かなくてはならない等々、定められているんです。学校で教職員50人は、大きな学校でないとなかなか難

しいだろうと思うのですが、これからは教職員もやはり労働者であるということをしちんとして、子どものためなら、という精神論も大事なのですけれども、精神論だけではなくて、労働者としてきちんと待遇を改善していただきたいと思います。それからもう一つは、先ほどからみんなで学校運営していくとあるのですが、小学校、中学校で何かそれぞれの文化があるような気がするのです。大変申し訳ないのですけれど、最初教育委員になって小学校に行ったときに、1組2組3組全部、九九の表が貼ってあるわけです。1×1から9×9までを白い模造紙に黒いマジックで、1組の先生も2組の先生も3組の先生もそれぞれ工夫して書いてあるのです。でも模造紙で作ることが目的ではなくて、子どもたちが九九を分かるかどうか为目的なのです。あれを見て、これでは多忙化すると思いました。1組の先生が作られたのを見て、2組の先生はもっと良いものにしよう、工夫しよう、オリジナリティを出そうと頑張るし、それが九九だけではなくて、国語、理科にもなるので多忙化すると思いました。それからもう一つは、例えば今週の目標「廊下を走らない」、今月の目標「あいさつをしよう」と書いてあるわけです。今週ということは、来週になったらもう取ってしまうわけです。これをまた模造紙に書いて貼るのかと思ったときに、小学校の先生は、子どもたちにどうやってアピールするか、丁寧に手をかける文化なのだったのです。よく考えてみたら、大学を卒業した人が小学校に行くか、中学校に行くか、高校に行くかで育つ文化が違ってくるわけです。だから、小学校のあり方と中学校のあり方をそれぞれ見ていかなければいけないことの再生産になってしまうのではないかと思います。外の目で見てみると、たまたま私は県立の学校から来たので、小学校を見たときに、これは多忙化すると感じました。例えば九九だったら、今日は2月14日だから2の段をみんなで言ってみようと朝に言ってみる、別の日に15番の子に言ってみてと投げかける。九九を毎日言えば覚えるだろうし、今月、今週の目標等は、例えば放送委員会で給食の前に「今週の目標は〇〇です」と言ったら、わざわざ紙に書いて貼って、来週になったらまた新しいものを貼る必要があるのかをつくづく思いました。とにかく子どもたちが、それを見てそうだと分かる仕掛けをもっと工夫した方が良いのではないですか。同じことをみんなでやって、チャートを作る時

間がもったいない感じがしたのですが、どうなのでしょう。小学校ではそのように感じませんか。

○学校指導課長（齋藤 信之）

おっしゃるとおりだと思いますが、もう本当に飾りみたいに掲示があったような時代から比べますと、先ほどの教材の共有のように、本当に必要最小限なものはそれぞれ同じものを共有して、しかも今年だけに限らず来年も使えるようなものとして残していくというような教材・教具の共有が図られるようになってきていると思います。九九に関して言いますと、コミュニティスクールのコーディネーターさんが働きかけて、地域のお年寄りが来校して九九を聞いて合格を出すという取り組みを行ったところ、聞き役のお年寄りから、子どもたちの成長が見えてとてもうれしいという話があったそうです。まさにWin-Winの形を作ってくださっているような学校もありまして、地域の力を積極的に使って子どもたちの学力向上に寄与しているというところを、また他の学校にも広げたいと思っております。

○教育長職務代理者（竹内 千恵子）

いえ、九九がどうこうではなくて、このチャートをたくさん作る時間を最小限にするべきで、自分たちだけでやっている、最小限になっているつもりだけれど、例えば全く違う人が見たときに、こうできるのではないかという意見が入るような、違う立場の人が見たら新鮮になるのではないのでしょうか。いつまでも自分たちだけで何か良い方法がないか考えるのではなくて、ぜひ外部の人たち、佐賀委員さん、林委員さんが見たら、企業としての視点になるので、外の目を入れて見ていただくということが大事なのではないのでしょうか。自分たちばかりでやっていて、再生産ばかりしているとなかなか抜本的な改良にはならないかと思いました。

○学校指導課長（齋藤 信之）

他の目からという点で言いますと、スクールサポートスタッフはかなり子どもに関わるものではない掲示物については、非常に活躍してくださっていると

思います。そういった意味でも、これも今まで教員がやっていたようなところをスクールサポートスタッフが一律、必要最小限のものについては、作って掲示してくださるところもありますし、そういうところをまた広げていきたいと
思います。

○市長(田村 敏和)

その他ございますか。

○教育委員(尾張 勝也)

竹内委員さんの関連で、自分もここまで手間をかけなくても、という掲示を見ることはよくあるし、本当に子どものためにやっているのか。でもやっている人は、少しでもこうしたら子どもが喜んでくれるかと子どもの喜ぶ顔を想像しながらやって、ついつい熱が入ってしまうことはあると思うのです。でも、最近の学校を見ていたら、その手間をかける場所、ポイントが少しずれている気がします。例えば、作るにしても子どもの興味関心が、その1枚を見て引きつけるようなものだったら結構時間をかけても良いと思う。その1枚を作っただけで、もうこの授業は成功のような導入ができれば素晴らしい。でも、今の学校に貼ってあるのは、そんなものではないのです。手で作ったら大変だから、デジタルのいろいろな資料を使うのは良いのだけれど、同じフォントの同じ形のものがポンポンと貼られていて、あれは文化ということからしても何なのかと思っています。今年から学校でスキーの出前授業を始めて、実際に子どもたちと先生にスキー靴を履いてもらうことを数校でやって、スキー遠足当日の段取りもスーパーバイザーとして全部コーディネートして気づいたことは、はっきり言って先生が余計なことに丁寧すぎる。つまり子どもに失敗させない、困らせない、スムーズにいくようにばかり時間をかける。グループごとにきちんとスキーを並べて、まとまって取りに行くようにしているけれど個々に探せば良いのではないか。そんな細かいことまでしないとダメなのかという状況で、極端な話では、お弁当を渡すにしても係の大人がいて、誰が誰に渡す表まで作ってある。来た人から持っていくようにすれば良いのに、つまりそんなことは学校ではいっぱいあるのです。事前にいろいろなことをして、子どもが困らな

い、スムーズにいくようにしている。もし困る子がいたら大変だから。その時の先生の言葉でとても印象に残ったのは「小さなミスが大きなトラブルに繋がるのです」。お弁当をもらえるのが少し後になったから、どんな大きなトラブルになるのかと思ったのだけれど、だから学校でいろいろなことに対するクレームもあるから、先生がもうミスしたらダメという思いから、そうしないようにすぐにする、それが子どもを守るだけで育てていないのです。守っただけだったら子どもは育たないのです。困らせたり悩ませたり失敗させたり、場合によってはわざとして、そこで殴り合いのケンカが起こって流血沙汰になるまでしたらダメだけれど、少しぐらい言い争いになったり困ったりしながら、自分たちは子どもを育てていかないといけないのに守ってばかりです。守ることに先生はもう疲れていると思っています。面白いことをするためにどうすれば良いか、この教材でどうやって楽しくやるかということではなくて、きちんとやらなくてはならない、もれのないようにみんなに伝えなければならない、その時には子どもの表情を一人ひとり全部をもれなく理解しなければならないのは疲れるに決まっています。言い方は悪いけれど、手を抜いていいところもいっぱいある。放っておいても子どもはきちんと自分でやるし、考える、考えさせる、そういうところが今の学校は圧倒的に少ない。「いや、尾張さん、あなたの時代とは違うのだよ。今こんなことしたら、すぐに大変なことになる」と言われますが、それは日頃の保護者との関係ができていないのではないかな。自分も偉そうなことは言えませんが、時間、手間暇をかけてやるどころと、もっと子どもに任せるところのメリハリが今の学校ではできていない、弱いと感覚的に思います。自分は自然の中で活動しているから分かるのですが、何でも危ない、やったらダメと言っていたら外で遊んで楽しいはずがないと思います。

○市長(田村 敏和)

他にご質問、ご意見ございますか。

○教育委員(林 勝洋)

計画案の5ページに「学校と教師の業務の3分類」という「A 学校以外が担うべき業務」、「B 教師以外が積極的に参画すべき業務」という部分の中

で、尾張委員さんも言われましたけれども、やはりどういう子どもを育てたいか、というところからスタートすべきかとまず感じました。そのときに関わり過ぎということがあると思うのです。子どもたちに主体性を持たせ、自主性を持たせる、考えさせる。当然、失敗も必要でしょうし、その中で子どもたちがどう判断していくかというところも多分にあると思うのです。「A」として5項目あります。例えば2番目の放課後の時間なんて、もう完全に管理外で学校が絡む必要があるのか、よほどのことは別として、本当にそこまで学校が管理する必要があるのか。管理外のことは完全に家庭に任せる、子どもたちに任せくらいのことを、きちんと表現しても良いのではないかと感じました。それ以外のところも、やはり子どもの自主性をもう少し強調しても良いのかという感じはしました。それから「B」の部分に関しては、やはり外注できるものは外注する。これは、お金がかかってくるという話になるので、いろいろと検討する部分もあるのかと思いますけれども、できるものは外注でも良いのではないかな。そうすることによって、いろいろな時間を削減していくことも必要な時期に来ているのではないかと感じました。

○市長(田村 敏和)

その他ございますか。

○教育委員(佐賀 一夫)

林委員さんもおっしゃった3分類についてですけれども、やはり改めて見ると本当に、先生方には随分と多くのことで依存してきたのだと思いました。今後割り振って、いろいろな諸団体が協力をしながらやっていけば良いと思うのですけれども、この働き方改革が、「誰がやるか分からない改革」にならないようにしないといけないと思います。いろいろな人が関わるごとに、任せっぱなしになることも出てくると思います。例えば今回のようなドカ雪が降った場合、業者さんは費用をいただいて仕事としてやるけれども、ボランティアとして雪かきをしてくれる人も出てきます。これだけ雪が降れば、ここに頼みましょう、など、前もってルールを、学校ごとで決めていけば良いと思います。広い白山市がすべて同じような行動パターンが取れるとは思えませんし、むしろ

ろバラバラの方が良いと思います。その学校ごとに運営協議会、P T A、ずっとそこに根づいた人たちもいるわけで、力をどんどん借りてやっていけば良いと思います。P T Aに関する記述もあったので、過去の体験談ですけど、私は12年ほど前に地元の学校でP T A会長をしていた際に、先生方の本来の業務ではないことで忙しくされている様子を見ていて、P T Aのことはなるべく自己完結しようと、いろいろな会議の資料、行事の準備を自分たちだけのことにしていました。学校には、資料をデータで渡してプリントをお願いしましたが、先生方はこれだけでも助かりますということでした。実際にやってみて見せることで、次の代にも引き継げたので、自立したP T Aを作ろうというコンセプトを立ててやっていました。そこでとてもやりやすかったのが、「地域開放棟」という自己管理で学校施設の一部エリアを使わせていただけるものでした。この仕組みがあるとP T Aも運営協議会もそうなのですけども、独自の準備、会議を先生方に残ってもらう、同席してもらうことなく進めることができるので、各学校にもあったら良いと思うのですけれど、現状はどうなのでしょうか。

○教育総務課長（西村 幸広）

全部の学校がそうなっているわけではございません。改築校については、地域開放ゾーンというところに会議室があり、先生がいなくても使えるようになっています。今から改修していく中で、そういったことも考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

○教育委員（佐賀 一夫）

そういう施設があると、地域の活動拠点になりますし、保護者自身も仕事を抱えて同じように忙しくて、なかなか決まった時間に来ることができない場合があります。自由に使えるスペースがあれば、どんどん任せることができるし、P T Aに自主性が生まれて、存在価値も上がると思います。地域のコミュニティに協力依頼をしていくのであれば、そういったスペースも同時に提供していただければ、地域に関わるタイミングをどんどん与えていくことになると思いますので、よろしくお願いいたします。

○市長(田村 敏和)

他、どうでしょうか。

○教育委員(安川 薫)

今年の初めに、先ほども話があったチーム担任制、不登校の取組といった学校ごとに対応していただいた取組があったと思うのですが、こういったことを共有する際に、直接いただいた資料みたいなものを見て初めて分かるのか、それとも、これ以外の小さいことも含めて、検索をかける、置いておくことができるプラットフォームみたいなところは、現状ありますか。

○学校指導課長(齋藤 信之)

データの言いますと、学校間共有フォルダというものがあまして、例えば先ほどの教材の共有にしても、自校だけではなく、他の学校のものを共有することもやっております。そういったところを利用すれば良いのだと逆に今、思いましたので、使って広げたいというふうに思います。

○教育委員(安川 薫)

先生方も年度ごとに入れ替わりもありますので、見て分かるものが一つ置いてあると、入口として良いのかと思ったので、また取組をよろしくお願いします。

○市長(田村 敏和)

他にございますか。

○教育委員(尾張 勝也)

意見なのですが、計画案8ページの「校務分掌・学校行事・日課に関すること」のところに「教職員の勤務時間を踏まえ、児童生徒の登下校時間を適切に設定する」とあります。先ほど竹内委員さんが、先生も労働者だから、ということを言われて、昔から自分たちの勤務時間が8時15分開始なのに8時

15分から子どもが活動をはじめるのはおかしくないか、とずっと思っています。準備時間は当然必要で、子どもが来るまでに先生が来て、その日の準備をして子どもが来る。8時15分に来て子どもをどうするか、場合によってはその前に子どもが登校して遊んでいます。それはどういうことなのか、いつも分からなくて、だからその辺からも考えていかないといけないのではないかな。何回も言うけれど、勤務時間開始と子どもの始業時間が同じなのはどう考えてもおかしい。いつ準備するのでしょうか。もうその時点で自然な時間外勤務が発生しています。早めに来ないといけません。8時15分から仕事開始だったら、良いか悪いかは置いておいて、8時15分ぎりぎりに間に合えば、その日の仕事が普通なら始められるようなことだから、働き方改革という時にまず、その辺からだと思っています。同時に昼の休憩時間も45分ある。その時に給食指導、清掃指導が入っている。これが昔からよく分からなかった。お金がないかもしれないけれども、時間の工夫、人の工夫、システムの工夫で、今までの学校という観念でマイナーチェンジしようと思っているからできないけれど、フルモデルチェンジしようと思ったらできるのではないかな。現に公立の学校でも、オルタナティブで自由にいろいろなことをやっている学校があるのではないかな。でも何か・・・といつも思っていて、本当にこのキャッチコピーの「働きやすさと働きがい」は本当に良いと思う。働き方が時短の問題ではなくて「働きやすさと働きがい」という部分で考えたときに、意識改革と言いながら、自分たち自身、教育委員会も行政側も含めて全然意識改革ができていない。マイナーチェンジをしているだけで、現行の法の中でもっとできるのではないかなと思います。計画案の5ページに業務の3分類として「A・B・C」に分けてあります。その前に、本当に学校以外か教師以外か負担軽減かを分ける必要がありますか。はっきり言って1番はしなくてもいいです。子どもが登校するのに、どうして大人がいちいちこんなことをしなくてはいけないのか。こんな恐ろしい社会で、子どもが自由に登校できる社会を作るのが自分たちの役目だと思っています。だから、もっとそういうところを考えなければいけません。前から思っているのは、法定帳簿以外のいろいろなものが多いすぎるのではないかな。多分、法定帳簿自体は少ないと思うのですが、それ以外に子どもの教育のため、或いは悪い言い方をすれば、自分たちを守るために最近いろいろな書類、マニュアル

ル等を作っているようで、もちろんあるに越したことはないかもしれないけれど、本当にここまでののかと思っています。そんなことに時間を使っていないで保護者、子どもとの信頼関係を深くするために時間を使えば良いのではないかな。何かあったときに困るから、きちんと会議記録を残しておかなくてはと、いったアリバイづくりみたいことばかりして、要するにアリバイづくりも大事かもしれませんが、もっと大事なことがあるということを考えるのが意識改革だと思うし、本当の働き方改革、働きやすさではないか。絶対に余計なものが多すぎて、事故が起こったときにマニュアルがあったから裁判で勝てたみたいな例を参考に、自分たちを守るための保険ばかり作っている気がして、本当に子どもを育てるという視点で考えているようには思えないことが日頃からたくさんあると思っているので、この機会に言わせていただきました。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

尾張委員さんとは反対で、やはり記録はきちんと残しておいていただいて、何かあったときに組織を守るということは必要ではないかと思います。不必要なものはいらないですが、簡単に何があったかは記録を残しておいていただきたいと思います。もう一つは、例えば登下校の見守りで朝早く来たときに、自分の経験で何十年も前ですけど、我々も春の交通安全運動のときは早く出て、交通指導で立っていなさいということはあるのです。それは交通安全協会との兼ね合いもあって出ているわけで、そうすると管理職の方から、今日は早めに来た人は、皆さん早めにお帰りくださいという一言が朝礼であるわけです。だから、そのとおりに15分早く来たから、15分早く帰ろうとはなかなかできませんけれど、自分たちの勤務をきちんと管理職は分かっているという気持ち的には非常に楽になったので、配慮があると大分違うのではないかと思います。先ほど佐賀委員さんからもあったように、あまり何でもギチギチにしないで緩やかな部分は緩やかにして、人間関係で同じ職場なので、それが働きやすさにも繋がるのではないかと思います。

○教育委員（尾張 勝也）

記録を残すなど言っているのではなくて、何か起こったらどうしようという事前の対策がないのも当然ダメですが、余りにも細部の細かいことまで想定して、先ほど言った小さなミスを一つも逃さないようにチェックしようというのは、少なくとも子どもを育てる場合においては、そこまで必要ではないのではないか。品質管理をして一点もダメな物を作ったらダメで、きちんと製品を作らなければいけませんということと違って、子どもを育てる場合はもう少しフアジー・・・、グレーの部分もあって良くて、記録が全くいらないと言っているわけではなくて、過剰すぎるというふうに思っているということです。

○市長（田村 敏和）

他、どうでしょうか。

○教育委員（林 勝洋）

9 ページの留守番電話のことなのですが、緊急連絡は年間に相当あるものなのですか。時間外の緊急連絡で、対応しなければいけない事案というものは全体で相当あるものなのですか。

○学校指導課長（齋藤 信之）

例えば交通事故に遭ったということと言えますと、年間、本当に数件程度かとは思いますが、基本的に学校の前に警察ではないのかという考えで、何でもかんでも学校が背負ってしまっていたところはあるかと思いますが、留守番電話の設定によって、どこにつなげば良いのか、いや言うまでもないのかといった判断をまず、家庭それぞれがしていただくということが必要かと思います。本当に緊急のものについては数えるほどしかございませんし、留守番電話がつかないということで市役所代表電話の方にかかってくるものもあります。緊急の場合は市役所代表電話ということも言っておりますので、それでも本当に命に関わるものは、こちらだけでも数件しかございません。

○教育委員（林 勝洋）

それに関わって、不当要求等に関しても苦情的なものといった対応しなくてはいけないものは相当件数あるものなのですか。

○学校指導課長（齋藤 信之）

なくはないですが、それこそ早期に私どもも関わるようにしています。やはり学校だけでなく、教育委員会も一緒になって方策を模索していくところが大切だと思いますし、不当要求かどうかグレーのものについて言いますと、完全に不当要求であるという判断もなかなかつきませんので、まずはやはり精一杯の取組はしていただいて、それでもというものについては顧問弁護士という話になるかと思いますが、現在そこまでの案件は、特に把握してございません。

○市長（田村 敏和）

それでは時間も大分来ていますので、教育長からお願いします。

○教育長（清水 茂）

とても熱い意見がたくさん出て、私もとても参考になりました。ありがとうございました。私からは、別にまとめるつもりはないのですが、計画案を作るに至った思いも含めてお話をさせてください。この計画をまず策定するにあたって、多忙化改善の目的が何なのか、ということをやはり明確にしないといけないという思いから、先ほど来、委員の皆さんからもお話があるように理念としまして「『働きやすさ』と『働きがい』を両立し、すべての子供たちへのよりよい教育を実現する！」という部分になります。このことをぜひ市内すべての教職員による共通理解を図ることはとても大事だと思って、この冊子の表紙に入れました。それから加えて国の指針にも載っておりまして、尾張委員の話もありましたけれども、教職にあるものにとって働きやすい環境とは一体何なのか。それから、働きがいに結びつく取組とはいかにあるべきなのかを、現場の状況を私たちもつぶさに把握しながら、そうした問いを常に持ちながら、取組を考えていかなければいけないと思っています。計画案の4ページにも少し記載させていただいているのですが、単に時間外在校等時間の減少の

みが、この働き方改善の目的化することのないように留意をしたいと思っています。教師が学びの専門職として子どもに全力で向き合えるようにすること、その働き方にやりがいや使命感を持ち続けられるような支援を、市教委として行っていきたいということでございます。これも尾張委員が先ほど言われた先生としてのやりがいというか、先生が子どもに対して熱い思いを持ってやることは、やはり第一にしないといけないと思っています。それから具体的取組については、3分類に基づくものを基本としております。全部で19項目あるのですが、同じ重さで取り組もうとすると無理が生じてくるし、必要か必要ではないかという部分もありますので、実態に即して優先順位を決めながら取組を進めていきたいというふうに思っています。特に市教委としては、先ほどダイジェスト版の下方に書いてありますように、重点的に取り組むことを4点掲げさせていただきました。この中でも特にと言われたら、私は中学校の部活動の地域展開です。中学校教職員の働きやすい環境づくりのためには必須でございます。新たに自分たちが来年度の予算要求で思っていることとして、コーディネーター室を設置する等、今後も放課後の子どもたちの活動の受け皿づくりに、関係部署と連携して取り組んでいきたいと思っています。それと話題には出なかったのですが、現在の教職員の健康管理がやはり非常に大事だと思っています。これが抜けていたと思ったのですが、健康診断の受診、それから再検査になった場合の勧奨、あとこれは書いてあったのですがストレスチェック、こういったものを通して、改善策の検討実施も継続して行ってきたいと思っています。幸い健康診断の受診率は、昨日、衛生委員会がありましたけれど、ほぼ100%に近い受診率です。それから要精検、再検査についての校長からの勧奨もほとんどの学校でされています。こういうことは、やはりとても大事だと思っているので、この計画に盛り込めたら良いと思っています。それから、市教委がこういうふうに計画を立てても、先ほど教職員の意識という話も出ましたが、実際に現場にいる学校が達成するためには各学校の取組が重要になっています。ともすれば学校の中に、まだ様々な課題を抱え込んでしまっている現状があるように思っていて、先ほど佐賀委員もおっしゃいましたが、コミュニティスクール等を通して、地域に開かれた学校づくりを引き続き校長に求めて、教育に関わるパートナーであるという意識を学校側にもも

っと持ってほしいと思っています。それぞれの学校には実態、実情がありますので、それぞれの学校で取り組めることをまた応援していきたいというふうに思います。なお、先ほどもありましたけれども、取組の進捗状況については、次年度以降もこの総合教育会議に報告をしていきたいと思っています。それと策定に向けた今後のスケジュールになりますけれども、本日、市長や委員の皆様からいただいた意見はもちろんですが、この後、学校長を通して上がってくる現場の声も反映した形で、計画案を完成させていきたいというふうに考えています。また他市町も同じように計画を作っていますので、その情報収集もアンテナを高くしまして、県教委連のネットワークもありますので、できるだけ参考になるものは取り入れていきながら、よりよい計画にしていきたいと思っています。最終的には年度末に開催する教育委員会会議で最終決定をしていきたいと思っています。

○市長(田村 敏和)

今日は教職員の働き方改革について、本当に様々な視点からお話をいただいて、大変有意義な会になったと思います。ただ、こうやってまとめていただいて、いろいろな取組をたくさんやってきていらっしゃる中で、それなりの効果も出ているのではないかと思います。とは言え、まだ平均30時間以内への減少、また、80時間超もまだ見られるわけでございまして、さらにどういう取組が良いのか、様々なご意見をお伺いしながら進めていただければと思っています。最後に、やはり教職員が元気でないと子どもたちも元気でないと昔からよく言われていることですが、教職員が疲れ切っているような状況では当然、学校にも子どもたちにも良い影響が出ないと思いますので、そのためにもしっかりとまた取組を進めていきたいと思っております。今日はどうもありがとうございました。

○教育総務課長(西村 幸広)

ありがとうございました。本日協議いただきました議題につきましては、皆

様からのご意見を参考に、今後の事務事業などを進めたいと思います。以上で令和7年度第3回白山市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

閉会 午後4時35分